

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論 文 題 目 『新撰万葉集』の漢詩 にみられる和歌的表現

氏 名 梁 青

論 文 内 容 の 要 旨

寛平五年（893）の成立とされる『新撰万葉集』（以降、必要に応じて「本集」と略記する）は、寛平御時后宮歌合の歌を主資料として、それぞれの和歌に一首の七言絶句の漢詩が配されるという体裁を取っている。『新撰万葉集』の漢詩が和歌をもとにして作られたことは、その表現も和歌の表現や発想に影響されることを意味する。中国詩とは異なる和歌の独特な表現を取り入れることによって、本集の漢詩は自然に中国詩の正格から逸脱してしまうのである。中国詩の基準からこれらの逸脱表現を見ると、違和感があり、日本漢詩に見られる言葉の限界だという安易な判断が下されがちである。しかし、『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的要素は、和歌と漢詩の表現や技巧および発想の交渉の結果であるという視点に立つて見ると、これまで論じられてきた本集漢詩の巧拙論と異なった、新たな見方ができるのではないかと考える。本研究は、『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現に着目し、それがいかに和歌との交渉の中で作られていったのかを考察するものである。具体的には、『新撰万葉集』の漢詩を取り上げ、そこに如何なる和歌的表現・発想が存在しているのかを考察しながら、同じ表現における本集漢詩・中国詩・和歌の異同や影響関係を検討し、その和様化のプロセスを論じる。そうすることによって、『新撰万葉集』の漢詩の性格と意義を改めて捉え直すと同時に、漢風讚美時代から国風復興時代に移行する過渡期における和漢交渉の様態を解明する。論文の構成は五章よりなる。

第一章では、九世紀末の時代の好尚、流行を考察するために、朝廷、撰閲家による公宴、私宴の場に注目し、そこで詠まれた紫藤詩・九月尽詩・瞿麦花詩・桜花詩を取り上げ、それと和歌との関連性について考察した。公宴、私宴の場に注目した理由

は、時代の好尚や新たな詩的表現が真っ先にこれらの場を通じて表現されると考えたからである。第一節では、撰関家の藤原基経の邸宅で詠まれた紫藤詩について検討した。基経は自分の邸第で、多くの文人を招き、詩宴を頻繁に催している。権門の庇護を求める島田忠臣は、基経の和歌好尚に迎合し、紫藤詩を献上した。この紫藤詩は白居易の紫藤詩の語句に抛りながら、藤を藤原氏に掛けてその一門の繁栄を讚美するものである。このことは、基経邸の風流文事が日本漢詩の和様化の一つの重要な契機となることを示している。第二節では、九月尽日の宴と九月尽詩を取り上げた。九月尽詩はそもそも菅原道真により創出されたものである。道真は白居易の三月尽詩を万葉以来の惜秋の伝統と融合させて、中国にはない九月尽詩を作り出した。このような日本独特な九月尽詩は宇多朝の宮廷に採り入れられた。この九月尽詩の宮廷化のプロセスを分析することによって、和漢の文化に強い関心をもつ宇多天皇が主催・支援する一連の文事は、和歌と漢詩の交流に有利な条件を提供して、和歌的漢詩表現の生成に深く寄与したことを明らかにした。九月尽の発想はまた和歌にも受け継がれ、後に『古今集』の九月尽の歌群として結実する。これは、九世紀末の日本漢詩の和様化が『古今集』へと繋がっていったことを端的に示している。第三節では、九世紀末の瞿麦花詩・桜花詩について考察した。島田忠臣・菅原道真は瞿麦花・桜花など伝統的な歌材を漢詩に取り入れて、中国詩の「芍薬・薔薇・梅・桃・蘭」に対する「瞿麦花・桜花」の優位性を唱える。そこには、日本漢詩を中国詩に比肩する、ないし凌駕する位置に置こうとした詩人たちの国風意識が窺える。宇多天皇や撰関家などの命令や依頼からも分かるように、この国風意識は詩人たちのみならず、広く貴族社会で共有されていたものである。なお、宮廷応制詩における和歌的表現の多用、公宴詩の詩題の日本化、詩歌同題の文宴の開催などは、いずれも和歌が次第に公的地位を獲得していくという文学史的動向を物語っている。本章の検討を通して、公宴、私宴の場は漢詩と和歌を融合させる一つの大きな契機となることが明らかになった。そこで詠まれた和歌的漢詩表現から、王朝人の国風意識の高揚が端的に窺える。

第二章では、『新撰万葉集』の漢詩における古来の和歌表現の受容を検証した。第一節では、四季部の漢詩における『万葉集』以来詠まれてきた歌材「女郎花」「萩」「藤袴」などといった歌材の受容およびそれらの語にまつわるイメージや季觀念の受容の実態を明らかにした。また、「男を魅了する女郎花」「袴に掛ける藤袴」などの表現は万葉歌にはない新しいものであり、言語遊戯的な趣向が凝らされていることが判明された。第二節では、「蕩子」「怨言」の使い方、離別後の場面描写を分析することによって、『新撰万葉集』恋部の漢詩には、平安朝を舞台にした男女の恋が多く描かれていることを明らかにした。そして、本集の漢詩においては、心の中で恋焦がれても人に知られないように恋心を抑える、昼はなんとか耐えられるが夜になると涙がはらはらと流れる、相手を忘れようとしてもかえって恋しさが募る、といった緻密な心理描写が見られる。中国閨怨詩との比較を通して、それが中国にはない、恋歌に基づいた表現であることを解明した。「昔（恩愛）…今（破局）」、「昼（我慢でき

る) …夜(もう耐えられない)」といった表現は、いずれも対照という技巧を用いて伝統表現を理知的に再構成する新趣向である。これらの表現は中国詩と直接的な出典関係をもたないが、中国詩に刺激されて形成されたものだと指摘することができる。要するに、『新撰万葉集』は、『万葉集』を強く意識し、古歌の世界を基盤としながらも、その一方で古歌と対峙しつつ当代和歌の新しいあやを誇り、「新撰」を高らかに表明しようとするという二面性を持っており、『新撰万葉集』の漢詩にもこのような「古」「今」の表現世界の対照がはっきりと見えるのである。

第三章では、主に上秋70、上夏35、上恋108の三首を中心に『新撰万葉集』の漢詩の展開の方法を検討した。上秋70では、和歌「声たててなきぞしぬべき秋の野に朋まどはせる虫にはあらねど」が「虫が人間のように泣く」という中国的要素を取り入れて、「泣く・鳴く」の掛詞を駆使し心情に関する叙述と物象に関する叙述とを重層化させることで、独自の表現世界を展開していく。対する漢詩もこの掛詞を念頭に置きながら、「虫鳴一人泣」の擬人表現を換骨奪胎して、「愁人慟哭類虫声」という表現を作り出している。また、上夏35の和歌「夕去れば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」における螢と恋との結びつきはもとより六朝閨怨詩に新たに学んだものである。しかし、中国詩においては、〈「火一恋心」の比喩表現〉〈「螢・火・燃」の語群〉〈螢の閨怨詩〉はそれぞれ異なる系統に属するもので、上夏35の和歌のような螢を恋心に喩える表現は殆ど見られない。上夏35の漢詩においては、「火・こひ・燃ゆ」の掛詞・縁語を介して、「螢・火・燃」の語群を「螢一閨怨」と関係づけて、「夏夜胸燃不異螢」という漢詩表現が練り上げられている。この二つの和歌的表現は「中国詩→和歌→本集漢詩」というプロセスを経て辿りついたものであることが判明した。また、中国詩では「糸・乱・思」の語群は主に樂府詩に用いられ、「糸」は殆ど織物の糸、青柳の糸、蠶の糸と規定されている。それに対し本集の上恋108では、「糸」を介して今まで関係性を持たなかった「断・軟・乱」と「蜘蛛の糸」とが繋ぎ合わされ、「閨中寂寞蜘蛛乱」という新たな表現が作り上げられる。なお、蜘蛛の網の薄さ、軟らかさ、断ち切られた有様などに焦点を当て、美しく精緻に描くところには、王朝人の独特の美意識を端的に見出すことができる。以上の考察によって、『新撰万葉集』の漢詩が言葉の連想によって独自の表現世界を切り拓いていることを明らかにした。

第四章では、『新撰万葉集』の比喩表現を取り上げ、それと中国詩との違い、和歌との関連を検討することによって、本集漢詩の比喩表現の特質を探った。上秋71の漢詩は和歌から影響を受けて、本来お互いに関係することなく独立して使われていた「衣_レ錦夜行・衣_レ錦還_レ郷」と「紅葉一錦」の比喩表現とが結びつけられ、「紅葉の錦を衣として着る」という表現となっている。また、上秋48の漢詩における「露一珠(玉)」の比喩表現は、中国詩に学んだものであるが、そこから「玉」に関連する「卞和泣_レ玉」の故事が引き出され、「白露は卞和が地に一面に敷いた碎玉のように輝いている」という新たな表現が切り拓かれる。これらの例を通して、『新撰万葉

集』の漢詩は和歌から影響を受けて、中国詩の比喩表現とはまったく異なるものに変容していくことを明確に観察することができる。この過程においては、平安人に「錦」と「衣_レ錦還_レ郷」、「玉」と「卞和泣_レ玉」の持つ共通性を再認識させることに、類書が大きな役割を果たしていることを論じた。加えて、紅葉の美しさを愛でる伝統的美意識をもとに、中国から伝わってきた漢詩表現「花→錦」が「紅葉→錦」に転換され、白色への好尚に基づいて「月光」が「白兔」と同一視されていく、といった独自の表現を切り拓いたことを指摘した。『新撰万葉集』の比喩表現には、「紅葉→錦→衣錦」「月の光→白兔」「つらら→鏡→見る→老い」という言葉の連想によって、中国詩には見られない、「人が紅葉の錦を衣にして着ている」「つららの鏡に自分の老いた姿を見ようとする」「月の光が無数の白い兔のように部屋に射し込んだ」など現実には起こり得ない景象が作り上げられているという特徴的な傾向が看取できることを明らかにした。要するに、原典の中国詩では違う文脈に属する表現が『新撰万葉集』の漢詩の中で言葉の連想によって、結合され、新たな意味を持つ表現として形成されていくことが、本集漢詩に見られる特徴の一つである。

第五章では、『新撰万葉集』の漢詩に用いられた「郭公」と「涙河」の用法を手掛かりに、王朝漢詩文における『新撰万葉集』の漢詩の位相について考察した。第一節では、王朝漢詩文における杜鵑詩から郭公詩への変遷について検討を行った。中国詩では、杜鵑は春の景物で、閨怨との結びつきが薄い。勅撰三集と菅原道真の杜鵑詩は中国の杜鵑詩の詠み方をそのまま継承している。それに対して、『新撰万葉集』の郭公の漢詩は、「杜鵑」の表記を用いず、和歌と同じく「郭公」と記している。そして、和歌の世界のほととぎすの詠み方を承けて、五月に郭公の鳴き声が独り寝の女の辛さをいっそう搔き立たせると詠んだり、郭公が一箇所に留まらず飛び回っている様子を浮かれ男に見立てたりして、様々な和歌的表現が試みられた。そこに用いられた「郭公」という詩語及びその類型表現は平安後期の『本朝無題詩』などに継承されていった。ここから、杜鵑詩から郭公詩への展開過程において『新撰万葉集』は重要な転換点として位置づけられることが明らかになった。第二節では、王朝漢詩文における「涙河」の用例について検討した。「涙河」は『新撰万葉集』の漢詩が初出である。それまでの「涙」に関する日本漢詩は殆どが中国詩を踏まえて詠まれたものであるが、『新撰万葉集』の「涙河」の漢詩は、中国詩の「涙如_レ河」の比喩表現を踏襲するのみではあき足らず、「水」に関連する言葉を駆使して現実にはあり得ない景象を作り上げている。『続浦嶋子伝記』と願文における「涙河」の漢詩と比較することによって、『新撰万葉集』の作詩法が後世の王朝漢詩文に一種のモデルを提供した意味を持つのだと指摘することができた。第三節では、『新撰万葉集』の漢詩の切り拓いた「〈郭公・家家〉〈郭公・枕〉〈郭公・鶏〉」の組合せ、「粉黛壞来収_レ涙処、郭公夜夜百般啼」「枉_レ馬蹄_レ」「錦葉林」「不_レ拳_レ煙」「含_レ情泣血袖紅新」などの日本的表現は、後世の日本漢詩文に継承されていくことを指摘した。以上の考察によって、それまでの日本漢詩の用語・表現・技法をさらに新しい方向へと前

進させたという点で、『新撰万葉集』の漢詩が大きな役割を果たしたことが判明し、『新撰万葉集』の漢詩表現を下敷きにした王朝漢詩が平安中後期に現れたことが明らかになった。